いうのです。並木君も見るともなく見たら自分が銃剣で殺してきたはずの自分の子供であったという。新潟部落を通りかかった兵隊たちが生きている子供を助けて近道を先き回りして、そこに立っていたというわけである。

それを眺めていた、子供を処分してきた奥さんたちに並木さんは、自分の子供だけ殺さないできたと思われるのが嫌で、その子供を兵隊から貰い受けその場で殺してきたという。此の事実は涙無くして聞かれぬ。このような悲惨事は沢山あります。

私は新京で聞いた話では、北満からの避難民が四十日もの流浪の旅の末、やっと新京に辿り着いたその姿、着物はわかめのごとくぼろぼろ、顔色は栄養失調という姿を見たフランスの宣教師が、人類史上かってない悲惨事と言われたという。

ともすれ私も昭和二十一年十一月八日新京を出発約一か月の旅の後、九月に佐世保港に上陸、故郷に一人淋しく帰郷し、妻の親たちにも申し訳の仕様もなかった。しかし、私もいつまでもくよくよしているわけにはゆかず、再婚を致し開拓者は開拓より外に道なしと決意いたし、隣村の現在地鹿島台町に活路を求めた次第です。そして開拓と同時に酪農を始め十頭ほどの乳牛を飼っていたが後継者がおらないので今はやめて、残り少ない人生を気楽に土いじりを趣味として暮らして居る次第です。

私の引き揚げ体験、帰国まで

岩手県　小原　昭

父は東京国士館大学を苦学して卒業した。間もなく国士館大学分館が私立高等専門学校鏡泊学園として、満州の鏡泊湖に創設され、父は学園の農業を担当していた。学園開設二年目にして、鏡泊湖畔大広嶺で匪賊討伐に行った際、学園の総務長山田先生以下十四人が受難に会い、二期生を迎えたのみで閉校になった。

閉校後、父は総務長山田先生の精神を引き継ぐため、教師一人と学園生若干名を引き連れて北満を目指し、興安嶺を越えて第二の故郷である免渡河へ腰を下ろし、主畜経営を目標とした自由移民の開拓団を設立したのだ。

昭和十一年二月、父、小原久五郎はその後家族を迎えに帰国、父・母・妹の四人と団員になる四人の計八人で渡満した。姉は高等科卒業と同時に六原道場に入所していたため、渡満のことを知らせず一人残してきた。

興安北省免渡河ホロンバイル開拓組合で親子四人の生活が始まったのだ。免渡河には小学校が無く、ハイラル市まで行かなければ日本人小学校は無かった。母は私たち二人を学校に通わせるため、父と別居して暮らした。昭和十一年六月、私は五年生、妹は二年生に入学し、一年のうちに宿泊場所が三回も移って母は難儀した。十三年、弟の誕生と同時に私は一人でハイラルの知人の経営する旅館・料亭に、そして、受け持ちの先生のお宅にと転々と預けられ通学した。

その後、姉を内地より呼び寄せたが、母はそれで安心したのかそれまでの無理がたたったのか、リウマチになり満鉄病院に入院した。私は母の看病をしながら病院より学校へ通ったものだ。小学校を卒業した私は高等科一年の時、組合の経営するハイラル市外の漬物工場より通学することになり、約一里半の道を毎日歩いたものだ。

高等科一年の二学期、両親のもとからの汽車通学を決心し実行する。それは苦しい通学であった。酷寒零下四十五度の朝三時に起きて一里の道を駅まで歩き、四時の列車に飛び乗り、四時間揺られてハイラル着八時、バスに三十分乗って学校に到着するといった登校であった。下校は、バスに三十分、ハイラル駅発六時で四時間乗り十時に免渡河駅到着、一里歩いて帰宅するといった繰り返しであった。途中風雪の時などには、狼に出会うこともあった。

学校では居眠りばかりで、ほとんど勉強はできなかったが、ただ昼休みのスケートの時間が楽しくて、両親には、「苦しい、つらい。」など言わずに通学した。しかし、三学期の終わり、無理がたまったためか感冒がもとで肋膜炎を患い、床についた。

その後、免渡河にも学童が増えたのでハイラル小学校分校ができ、全校生徒七人の入学で開校式をやった。私は高等科二年、病気がちの妹は五年であった。小野寺御夫婦が先生で、校長である男の先生は高学年を受け持ち、低学年は女の先生である奥さんが教えてくれた。校長先

生は病気がちで（糖尿病）顔がむくみ、床についている先生の枕もとに座って勉強するのがしばしばであった。

昭和十五年春、私は高等科を卒業し、父がお膳立てをしてくれたハルピン市にある青年義勇隊中央医院看護婦養成所に、第一期生として入所した。入所三か月目に肋膜炎を再発し、自宅療養をすることになったが、やがて全快し、再び同養成所に二期生として入所した。かつての同期生は一年先輩になり、命令には絶対服従しなければならず、半年は辛い毎日であった。

昭和十七年、思ってもみなかった「チチキトクスグカエレハハ」の電報を受け取る。足元から膝が崩れる思いでただ呆然としてしまった。父は脳溢血で四十七歳で死亡。その時母は身重の体で三十八歳、長女二十一歳、私は十六歳、妹十三歳、弟は四歳だった。母は大地にほうり出された心地だっただろう。

昭和十九年三月、養成所を卒業、四月より二年義務年限の看護婦として働く。この年に全満義勇隊訓練所では発疹チフスが大流行し、病院から交代で各所に応援治療看護に派遣されていった。嫩江大訓練所にも発疹チフスが流行し、私も応援看護に出張し、その一員に加わった。二十年一月一日付けで嫩江訓練所病院に転勤になった。転勤一か月半ころに比較的軽症の発疹チフスに感染し、三週間休養をとった。その後、母からの知らせで妹が入院したことを知り、取るものも取りあえず自宅に帰りハイラル陸軍病院に駆けつけた。やがて、妹は死亡。十六歳であった。

戦況が激しくなったある日、訓練所にも兵役に達した生徒もあるため、所内での兵役身体検査がこの病院で行われた。所長をはじめ各訓練所幹部や中隊長の立ち会いのもとで、厳重に検査が行われた。また、各所に点在している義勇隊開拓団員も集まって検査を受け皆、甲種か乙種の合格で入隊していった。間もなく、訓練所長の近藤元閣下も召集され第一線に行かれた。

昭和二十年八月十九日、突然、訓練本部全員集合のラッパとサイレンが鳴った。急いで本部前に集まると『日本が負けた』ことを聞かされ、とても信じられない気持ちで腰から下が抜ける思いであった。看護婦は身の危険があるので髪を切って坊主になり、訓練服を着、訓練帽子

を被り、足にゲートルを巻いて看護に当たった。

八月二十三日、ソ連が接収に来るというので、重症患者を残し、軽症患者と共に夜間行軍十里の道を目的地の八州開拓団にたどりつく。出発の直前に手渡された致死量の青酸カリを肌身につけて歩いた。やがて夜明けとともに騎馬の連絡がきて、ソ連軍は入ったが、婦女子には危害を加えないから元の場所に戻るようの通達で、また十里の道を戻り帰院した。

八月二十五日、訓練所全員移動命令で嫩江街の陸軍部隊兵舎に収容された。兵舎内は規則が厳しく、その上、舎内はすし詰めで座っている場だけが自分の場所で、足を差しちがえてのざこ寝である。赤痢患者が出ていっそう舎内は厳しくなり、給水は行列をしてもらうありさま。やがて、部隊の兵隊たちはソ連に連行され、婦女子と男子は老人ばかりになった。そして、バラ線の張り巡らされた官舎に移された。この時に初めて知った収容所内には、軍人の家族はほとんどいなかった。開拓団員と市内に住んでいた一般民だけであった。「なぜ軍人の家族だけがいないのか。」そう思った時、私のなかに腹立たしさが募ってきた。軍隊は一般市民を守るべきなのに、自分の家族だけ先に引き揚げさせたのかと、無知の私の推測でも分かった。

寒い冬を越し、昭和二十一年三月、チチハルに南下した。チチハル収容所では、栄養失調と発疹チフスの大流行で多くの人が次々と死亡した。ソ連軍が引き揚げてから内乱が起き、八路軍と中国軍の小競り合いがあり、収容所内に医師や看護婦の調達にきた。そのため収容所を逃げ出し、市内の満人の家に住み込み女中や洗濯女などをして転々と暮らし、約一か月くらいしてから収容所に戻り、皆で無事を喜び合ったものだ。

チチハル市内全収容所内に孤児が増えたので、チチハル日本人会で養護院を開設し、私たちの収容所内にも保母を捜しているとのことで、私がにわか保母になり子供たちの面倒をみることになった。院長・副院長・主事・保母四人と三歳以上十八歳までの性質の違う子供たち二十四人。なだめたり叱ったり、にぎやかな暮らしのなかで私はふっと母親を思い出し、時には子供たちと泣くこともあった。そこで三か月くらい暮らし、一週間後に内

地送還があるとの通達があった。昭和二十一年九月、チチハル駅より無蓋列車に乗り、子供たちと一緒に出発した。

一夜明け、ハルピンに到着して十日滞在、新京に一週間止まって列車が出発した。途中八路軍と国府軍の内乱直後で治安が悪く、下車して線路づたいに四キロを、荷物を背負った上に子供を乗せ、両手に子供を引いて歩いた。ほんとうに死ぬ思いであった。子供たちはだだをこねたりすねたりもせず、よく頑張ってついてきてくれたので、私は思わず涙が出て子供たちを抱きしめたことが思い出される。

コロ島まで何十回となく止まり、時には、「女を出せ。」とか、めぼしい物の略奪があった。コロ島に到着、DDTをかけられ白い粉ぐるみになったが、その夜から安眠することができた。

コロ島には一週間滞在し、乗船することができた。船がしだいに岸壁を離れ、懐かしい『蛍の光』のメロデーが流れ、たとえようのない涙が止めどもなく流れた。

何度か口にしようと思った青酸カリ。その度に母の顔が写り、額の奥に光っていた目が私を厳しく見据えて、「強くなれ。」と励ましてくれた。護身の青酸カリ、汗と熱でカプセルも溶けてべっとりした薬を海に投げた。

博多に上陸し各県に別れた。私は北海道に行く子供四人を連れ東北本線に乗った。そして車中で、北海道に行く夫婦に子供たちを頼み、北上駅に下車して横黒線に乗り換え、懐かしい藤根駅に下車した。昭和二十一年十一月初旬、実家にたどり着き、母と弟の死亡を知らされた。祖母一人いる実家に、姉夫婦と四歳になる妹の三人が引き揚げて身を寄せていた。丁度、秋の取り入れだったので、到着した次の日から農業の手伝いをやらされた。その後、慣れない農業を一年手伝い、昭和二十三年に私は二十二歳になった。親戚の人の勧めで盛岡友の会生活学校に入学し、洋裁・料理・その他を勉強した。

妹は五歳になったが、栄養失調で寝たり起きたりの毎日だった。姉がわが子のように育て、夜も寝ずの看病した甲斐もなく死んだ。

昭和二十四年四月、友の会生活学校を卒業した。そして、着のみ着のままで手作りわらじを履き、未墾の土地

を鍬で起こすのが初仕事であった。義兄と姉と私の三人の初めての共同作業だった。

入植から今日まで

開拓は文字通り肉体労働。農具は何一つ無く、義兄が日雇いをして一つ一つ用意した。素足にフキの葉を巻いて一鍬一鍬起こし、もっくれを焼き開いた。無肥料の土地では一・二年は種子よりも小さな芋。それでも有り難かった。

昭和二十六年に結婚と同時に分家、姉夫婦は新たな土地に入植した。二十八年に長女を出産したが未熟児のため九か月で死亡。昭和三十年には姉が女児を出産、しかし、義兄が突然心臓麻痺で死亡した。すでに義兄たちは酪農経営をしていたので、二戸分の農業をしなければならず、四キロの道の往復はずいぶん難儀であった。次女・長男・次男と育てるうち、昭和四十六年十二月、突然夫が急性肺炎で死亡した。この時から私の苦闘が始まった。

この時、姪は高一、次女中三、長男中一、次男小五、乳牛二十四頭、土地二戸分で五百二十アール。泣いている暇がなかった。どうして生きていったらよいか、ただ無我夢中で子供たちと姉と六人力を合わせ、がんばって生きてきた。

主人を亡くしてからいろいろなことがあったけれど、幸い子供たちはのびのびと成長してくれ、皆、高校を出、姪は東京に嫁いで二人の母、私の次女は青森に嫁いで三人の母、長男も三人の父、次男も結婚し一人の父。これからは孫をみながら自分の人生を取りもどそうと思った時、昭和六十一年十一月、思いもよらず子宮癌の手術をした。

幸い初期であったから快復も早かったが、放射線の治療を受けたため、その後遺症で無理のできない体になった。引き揚げの時より二度目の生き返り、この命を大切に、命のある限り生きたいと思っている。

勤労奉仕隊から開拓花嫁に

山形県　坂野　マサイ

私達の青春時代は国を挙げての戦争の最中で、大勢の